

教官人事

内科学第二 大 山 口 渥 助手

北海道出身，昭和38年3月東京薬科大学薬学部薬学科を卒業，昭和41年4月京大医学部に入学，昭和45年9月同校を卒業した。昭和45年11月より本研究所附属病院において研修，昭和47年11月より医員として勤務，昭和49年4月助手に任命された。

同氏の人柄は穏健で，臨床免疫学に興味を抱き，各種胸部疾患におけるリンパ球の機能や Transfer Factor について研究を行っており，今後の研究の進展が期待される。このような理由から同氏を内科学第2部門の助手として推薦した。
(大島駿作)

胸部外科 山 本 博 昭 助教授

昭和36年，京大医学部卒。同期生に当部門としては，人見，船津，伊東，源河，北野，甲斐君と錚々たる連中がある。昭和46年，私の教授就任時，桂病院より講師としてきてもらって，昭和49年末に，前の助教授人見君が関西電力病院に呼吸科部長として転出されたので，その後任となってもらった。従って，業績，人柄その他については既に本誌に紹介したので再述しない。

同君に対して，当部門が期待しているのは次

の2点である。第1は，臨床面での私の代形で，とくに心臓外科の発展の中心となってもらうことである。これは，同君が卒業後現在の国立岐阜病院（当時国立日野荘）に赴任されてから，約8年にわたって，同病院の心臓外科創立の主力となっていた実績を買ったのである。第2は，最近の診療体系の変革のなかで，他部門との共同診療例が増加し，多くの交渉が必要となったので，その際に彼の開放的な性格が有用であると思われたからである。
(寺松 孝)

胸部外科 伊 藤 元 彦 講師

昭和38年，京大医学部卒，当部門としての同期生としては，石井，安田両君がある。昭和46年，私の教授就任と同時に助手になっており，山本君と同様に本誌に人柄その他は紹介した。

講師として，当部門が同君に要望し期待して

いるのは，腫瘍についての基礎的，臨床的な研究の中心となることである。これについては，同君の助手就任以来の実績が買われたわけであるが，今後，私としては，同君の夢を育て，その大成を期している次第である。
(寺松 孝)

内科学第二 大島 駿 作 教授

昭和50年4月1日停年退官の内科学第二部門主任，辻周介教授の後任として，結核胸部疾患研究所教授会は結核胸部疾患研究所教授候補者選考内規（以下，内規と言う）に基づき，以下に示す如き経過を経て昭和50年7月17日，当時の結核胸部疾患研究所助教授大島駿作氏を選考決定した。（昭和50年8月16日付発令）

1. 経 過

内規第2条第1項により，内科学第二部門主任教授候補者の選考を所長の召集する全教官の集りに附議した上，内規第3条に従って選考の方針について討議を行なった。

この討議の内容を基盤として，内規第3条及び第4条により成立した選考委員会が決定し，研究所の内外に公示した選考方針は次の如くであった。

「結核胸部疾患研究所内科学第二部門の教授候補者は，胸部疾患に関する内科学を専攻する人から選ぶ。但し，本研究所には他に臨床部門として内科学第一，胸部外科学及び臨床肺生理学等の部門があり，内科学第一部門では化学療法に関する研究を主として行なっている。」

この方針を明記して，選考委員会は所内の全教官及び国公立大学医学部，研究所，国立病院及び療養所の施設長にあて公募する旨の文書を昭和49年12月16日付で発送し，締切りは昭和50年1月31日とした。

昭和50年2月上旬以後，推薦及び応募のあった者に選考委員会推薦者を加えた候補者について審議を重ね，7月上旬までに13回の選考委員会が開かれた。

昭和50年7月17日，内規第7条に従って選考委員会は数名の候補者を選出し，資料を添えて教授会に提出した。教授会は内規第8条により慎重審議を行なった上で，即日投票することに決定し，内規第8条に基づき投票の結果，京都大学結核胸部疾患研究所助教授大島駿作氏に決定を見たものである。

2. 内科学第二部門主任教授選考にあたっての基本方針

結核胸部疾患研究所の将来への展望については所内でも十分に論議されるとは言えない状態では，その将来像は各研究者のおかれている立場によっても異なるであろうが，今回に限らず教授選考は教授の責務の比重から言っても今後の研究所のあり方や方向にとって特に大きな意義をもつものと考えられる。

同科学第二部門主任教授の選考に当たっても，まず胸部疾患の内科学を専攻する人という限定を設けたが，当然そのなかでどのような領域の研究者を求めるかが最初に議論された。これは勿論，全教官の集まりにおける論議の内容から逸脱することを意味するのではないが選考委員の間では退任を予定されている教官を含めた席での領域の問題に関する討議には一定の限界があることが指摘された。この点は今後検討を要する問題を含んでいると考えられる。ともかく領域の問題は出来るだけ幅広く考え，具体的に可能性が多いと考えよれる候補者を加えて審議を進めることが合意された。

結核胸部疾患研究所が今後，呼吸器を中心とした慢性疾患をめざして進むか，循環器系をどのように考えるか，或は例えば免疫学や生命科学といった特定の分野を志向するかということとを別にしても，現在研究分野として欠けていると思われるものは免疫学や生化学の方面である。

これに関連して従来，内科学第二部門においては遅延型過敏症や免疫不全等を中心とした基礎的ならびに臨床的研究が進められて来たことも十分尊重されなければならないと考えられた。

当然のことながら診療科をもっている研究部門であるから，その教授候補者としては研究業績の上ですぐれているばかりでなく，診療と医学教育についても豊かな経験を識見とを有し，

部門や診療科の管理運営に関しても構成員のすべてに対して十分な指導性を発揮出来る人格が要請される。

その他、選考委員の間では出来るだけ全員一致方式を採りたいこと、研究業績の評価を特に重視すること、及び現在研究所の臨床面で進捗しつつある新しい診療体制にも沿った選考でありたい事等が討議された。

選考委員会は以上のような方針のもとに、全国公募のほかに関係領域の専門家を通じて候補者を求め慎重に審議を重ねた上、最終的に3名の候補者について昭和50年7月17日の教授会に選考経過と共に報告し、教授会で厳正な審議を経て投票決定されたものである。

3. 大島駿作氏（昭和2年8月20日生）の略歴

(1) 学 歴

昭和26年3月 京都大学医学部医学科卒業
 27年3月 京都大学医学部附属病院における実地修練終了
 27年7月 第12回医師国家試験合格
 （医籍登録第145609号）
 34年5月 医学博士（京都大学）の学位を授与さる。

(2) 職 歴

昭和27年4月 京都大学結核研究所志願医員
 29年4月 京都大学結核研究所副手
 29年12月 京都大学助手（結核研究所）
 34年6月 京都大学助教授（結核研究所）
 34年8月 Post-doctoral Fellow として渡米、Virginia 大学微生物学教室（Q.N. Myrvik 博士）にて研究を行なう。
 35年9月 帰 学
 現在に至る。

4. 研究業績の概要

大島駿作氏の研究業績は概括して以下の三項目にわけられる。

(1) 結核感染に対する生体の防衛機序に関する研究。

結核免疫における液性因子の重要性についての研究が発表されたのは1954年であったが、今

日液性因子の意義が見直されている面もあって興味深いものがある。この仕事から獲得性抵抗力としての体液及び血清の結核菌発育阻止現象を追究し、結核に対する自然抵抗力及び獲得性抵抗力における液性因子の化学的分析に発展している。これらの実験免疫的研究を基礎として人尿に於ける抗結核菌性因子の研究が進められ、ペプチド様物質の単離に至っている。このものが同定され、化学的組成が明らかにされるのも近いと考えられるし、この様な一連の業績によって昭和49年4月に日本結核病学会より今村賞を授与されている。この間、米国留学中に感作家免肺滲出細胞抽出液中の抗結核菌性物質リゾチームに関する研究が行なわれている。

(2) 結核アレルギー、主としてツベルクリンアレルギーの受身伝達に関する研究

遅延型過敏症の一つの典型であるツベルクリンアレルギーの受身伝達に関する実験的研究が家兎肺胞単核細胞抽出液やその電気泳動分画について行なわれ、その機序や Transfer Factor の本体を実験条件をかえることによって追求している。この研究は家兎とモルモットの差から、人血漿分画による受身伝達に及び、次第に臨床的に種々の胸部疾患に見られる Immune Deviation に関連性を有して来るわけである。

(3) 臨床研究

臨床研究は肺結核から肺腫瘍や慢性閉塞性肺疾患に及ぶ広汎な領域で行なわれている。

非特異的慢性肺感染症 180 例の検討が行なわれたのは1968年で、ようやく非結核性胸部疾患への取り組みが実って来た感がある。

肺癌の放射線治療についても95%酸素+5%炭酸ガス吸入下照射療法という新しい試がなされている他、担癌生体における β -Aminoisobutyric Acid の意義を検討している。慢性閉塞性肺疾患に関しても α_1 -Antitrypsin や血中 IgE を検討している所に今後の臨床免疫学的な研究の発展が期待される。

以上の業績の主要なものは国際的な評価を得て公表されて居り、日本結核病学会、日本胸部疾患学会、日本アレルギー学会、日本肺癌学会

等の他、実験結核研究会や日米医学協力会議でも数多くの発表が行なわれている。

大島駿作氏の研究業績は上述の如く広く胸部

疾患の一般にわたっているが、特に免疫学的なアプローチを行ないながら独自の領域を目指しているように思われる。（文責 前川暢夫）

内科学第二 小原幸信 助教授

島根県出身、昭和27年3月京大医卒、昭和28年5月京大結核研究所志願医員、昭和29年4月同副手、昭和30年6月同助手、昭和34年5月医学博士、昭和41年7月講師に昇任、昭和50年10月1日付をもって助教授に昇任した。

同氏の人柄は温厚篤実で、その業績は肺結核に関する臨床的並びに病理学的研究、結核性炎症の基礎的研究、肺癌に関する基礎的並びに臨

床的研究を中心とし、その研究領域は広く各種の肺疾患に及んでいる。

また同氏は内科学第2部門の診療科講師として病棟医長を長年に亘って勤め立派にその職責を果たした。

以上同氏の履歴、人柄、業績から同氏を内科第2部門の助教授として推薦した。

（大島駿作）

内科学第二 泉孝英 講師

大阪府出身、昭和35年3月京大医卒、昭和40年3月京大大学院研究科博士課程修了、同年7月京大結核研究所附属病院助手、同年9月京大医学博士、昭和42年8月より約1年間ロックフェラー大学に留学、昭和46年8月より約1年間カロリンスカ研究所に留学し、帰国後内科学第2部門診療科助手として勤務、昭和50年10月1日付をもって講師に昇任した。

同氏は才気煥発、学業に熱心でその業績はサ

ルコイドーシスの基礎的および臨床的研究、ツベルクリンアレルギーを始め各種遅延型反応機序に関する基礎的研究、各種肺疾患に関する免疫学的研究など広範囲に亘っている。

また同氏は臨床においてサルコイドーシス特殊外来を担当し立派にその職責を果たした。

このような同氏の履歴、人柄および業績から同氏を内科第2部門の講師として推薦した。

（大島駿作）

内科学第二 門政男 助手

広島県出身、昭和45年3月京大医卒、同年6月医師免許証を取得、同月より京大医学部附属病院において研修、昭和47年4月より福井赤十字病院内科に勤務、昭和48年10月より本研究所附属病院に医員として勤務した後、昭和50年10月1日付をもって助手に任命された。

その人柄は誠実で、現在臨床医として勤務しながら「気道における局所免疫」の研究に励んでおり、将来その成果が期待される。

以上の理由により同氏を内科学第2部門の診療科助手として推薦した。（大島駿作）

放射線科 安倍隆二 講師

山岡久泰 助手

昭和50年10月1日当研究所附属病院に放射科が新設され、同時に講師、助手各々1名の定員が認められた。同じ日に佐川が放射線科長に任命されたので、全教官の集いで佐川より放射線科教官の選考方針、すなわち、臨床教授間の話し合いにより選考したい由を説明し、了承され、臨床教授により選考を行った。その結果、講師として安倍隆二助手の昇任、助手として大阪赤十字病院麻酔科医師山岡久泰の採用を決定した。

安倍隆二君はすでに紹介されたので、その履歴は省略するが、持前の vitality を充分発揮されるものと思われる。

胸部外科 長瀬千秋 助手

昭和45年、京大医学部卒、控え目で真摯な人柄で、外科医としては数少ないタイプである。これが、同君の患者さんへの接し方の信頼をえている理由であり、また当部門が迎えた理由の1つであるが、何といってもその研究熱心が最大

山岡久泰君は昭和36年京大の出身で、当研究所の武田、清水両君と同期である。卒業以来、麻酔を専攻され、全国でも数少くない麻酔指導医の1人である。呼吸管理に興味をもたれ、胸部研にこられたものであるが、放射線と同時にRCU 方面での活躍が期待される。

長年の望みであった放射線科が新設されたことはよろこびにたえない。歴代所長の御努力に感謝する。しかし、当科は設立されたばかりであり、設備の点でも不十分である。今後の問題として、是非RI 診断室を作り、現在のような不便を解消したいと考えている。

(佐川弥之助)

のものである。現在、癌細胞の培養、それについての抗癌剤の選択、最終的には、肺癌治療に際しての術後の化学療法方式の確立を目標としている。

(寺松 孝)